



自己改革 実践中!



News!

## 自己改革を進めるとともに「見える化」を

県内JA組合長・役職員がJA営農経済事業改革実践大会

茨城県本部

### JA営農経済事業改革実践大会



「歩調を合わせ着実な改革を」と呼び掛ける佐野運営委員会会長



連帯を誓う出席者

大会で共有した内容を踏まえ、JAと県本部が一体となり自己改革の取り組みを今後さらに進めていきます。

佐野治運営委員会会長は「自己改革を進めるとともに、取り組んできたことを、組合員や消費者に『見える化』をしながら伝えることが重要」と呼び掛けました。基調講演では、本所営業開発部の寺島晋上席主管が、消費の変化・動向に基づいたJAグループに求められる対応について提言しました。また先進事例として、販

売事業ではJA水戸営農販売部の雨谷雅彦部長、生産資材事業ではJA常総ひかり経済部生産購買課の富田知明課長がそれぞれ取り組みを報告しました。川津修県本部長は、県本部職員自らが担い手生産者約200人を訪問し実施したアンケート結果などに触れながら、「現況を冷静に分析し、要望に応じていく」と決意を述べました。

茨城県本部は7月13日、県内JAと県本部の自己改革に向けた取り組みをJAグループ茨城で共有するとともに、農業者の所得増大への貢献に資することを目的に、「JA営農経済事業改革実践大会」を開きました。平成28年の「JA営農経済事業改革総決起大会」から続く本大会には、県内JAの組合長はじめ役職員約120人が出席しました。

News!

## 各部門の今後の対応を協議

JA生産資材担当常勤役員会議を開催

秋田県本部



JA生産資材担当常勤役員が今後の対応で協議



低価格モデル農機(大型トラクター)を見学する参加者

会議では、本所生産資材部の富田健司部長が全農自己改革の実践内容として、生産現場の声を反映し機能を絞った低価格モデル農機(大型トラクター)の取り組みについて説明しました。また、秋田県本部は、①肥料部門・集約銘柄の取り組み②農薬部門・担い手直送規格農薬の取り組み③物流部門・大規模経営体への直行配送の取り組み④農機部門・農機レンタル機の提案

⑤技術部門・低コスト栽培(密苗)の取り組み⑥出向く体制・法人などへの訪問活動——などについて報告し、今後の対応について協議しました。2日目の研修では、低価格モデル農機(大型トラクター)の実演機を見学し、型式や機能について学びました。秋田県本部は、今後ともJAと共に生産者に有益となる提案を行い、農業所得の増大と農業生産の拡大、地域の活性化に努めます。

秋田県本部は7月10、11の両日、JA生産資材担当常勤役員会議を岩手県花巻市で開催しました。

自己改革 実践中!





## 7月7日は「乾しいたけの日」です

東京・銀座で乾しいたけの魅力をそうめんとともにPR

麦類農産部



恒例の乾しいたけと  
そうめんの無料配布



乾しいたけの日  
キャンペーンステッカー



乾しいたけとそうめんの日  
PRポスター

日本産原木乾しいたけをすすめる会では消費拡大に向けて普及啓発や食育支援活動などを行っています。同日をそうめんの日としている乾麺組合と共同して数寄屋橋公園で、乾しいたけとそうめんの無料配布を行い、街行く人にPRしました。くまモン、めじろんなど人気のご当地ゆるキャラの

登場もあって、会場は大いに盛り上がりました。今年は開催日が土曜日ということもあり、親子連れを中心に幅広い年代にアピールすることができ、準備した乾しいたけ1000袋は30分足らずで配布終了となりました。全農は、今後とも国産乾しいたけの価格安定に向けて業界団体と積極的に連携し、消費の裾野を広げるよう取り組んでいきます。

全農が加盟する日本産原木乾しいたけをすすめる会は、7月7日の乾しいたけの日に東京・銀座の数寄屋橋公園で恒例の無料配布を行い、乾しいたけのおいしさや保健的効用をPRしました。



## 日常の点検・整備で農機長持ち

セルフメンテナンスのインストラクター講習会開催

営農・技術センター



25人が参加したセルフメンテナンス インストラクター講習会



コンバインを使って確認する参加者

特殊な技術や工具がなくても、ユーザー自らが日常的にできる点検・調整・交換をすることで、機械を長持ちさせることができます。営農・技術センターでは、ユーザー自らがこれらを行うことを広めるため講習会を実施しました。講習会はトラクター、コンバイン、田植え機を対象に、エンジンオイルの点検・交換方法やエアクリナーの掃除など、簡単なながら機械を長持ち利用する際には欠かすことのできない点検、整備について、実際に機械を用いて説明を行いました。また、ユーザー向けのセルフメンテナンス講習会の事例を紹介し、今回受講した25人が、各都府県での講習会開催に向けたイメージをつかむことができました。

耕種総合対策部営農・技術センター生産資材研究室は6月21日、県JA・県連・県本部の担当者を対象に、「セルフメンテナンスインストラクター講習会」を開き、25人が参加しました。

# Zennovation 2018 - 2022

全農イノベーションチャレンジ

ゼノベーターからの  
メッセージ ①



新規事業提案制度は、2022年の全農創立50周年に向けた記念プロジェクト「Zennovation 2018-2022 (Zennoh Innovation Challenge)」として今年から5カ年プロジェクトになります! Zennovationは、これまでの事業・歴代の先輩方に感謝しながら、これからの50年に向け、未来の地域社会と農業に、私たちがつなぐものは何か全員で考え、未来へつないでいくプロジェクトです。新規事業提案制度を通じてこれまで全農グループ内でイノベーションを起こした職員に、事業内容や提案当時について話してもらいました。

【総合企画部】



## 過酢酸製剤の製造・販売について

本所広報部 落合 成年さん

### 新規に認可の食品添加物 「過酢酸製剤」販売事業化

私たちのプロジェクトは平成26年の夏に立ち上がりました。内容は新規に認可される食品添加物「過酢酸製剤」の販売事業化、というものです。メンバーはJA全農ミートフーズ(株)(菊池)、営農・技術センター(菅原)、家畜衛生研究所(落合)という構成で、事務局は事業開発課(黒崎)、当初より一部上場企業である小津産業(株)とそのパートナーの米国企業、エンピロテックケミカルサービスCo.が参画していました。  
※所属は全て提案当時

### 急速に進む過酢酸製剤への 切り替えに対応が急務に

生鮮品の品質・鮮度保持は、業界にとって極めて重要な問題であり、全農にとっても大きな関心事です。特に食品添加物仕様の殺菌剤は日本では次亜塩素酸ソーダが中心ですが、有機物への接触による不活性化の問題や、塩素の発がん性の問題もあり米国を中心に過酢酸製剤への切り替えが急速に広がりました。26年4月に厚労省が同製剤の認可審査を開始したのを機に、将来のわが国の生鮮品殺菌剤市場が大きく変わ



提案メンバーの左から菊池さん、落合さん、菅原さん

る可能性に鑑み、いち早く状況に対応するためにプロジェクトを立ち上げ事業化を模索しました。

### 部門横断の大プロジェクト 29年3月に新会社立ち上げ

幸い、それぞれの所属部署が本プロジェクトを支持してくれたため、提案はスムーズに行えました。対象品目が多岐に及ぶことから、生活リテール部、畜産生産部、園芸部、肥料農薬部、JA全農青果センター(株)、生産資材部など当初メンバー以外の部門横断の拡大プロジェクトが出来上がりました。延べ60回近いミーティングや全国各地のプロイラー処理施設、選果場、公的試験場での試験や意見交換を行いました。これだけ多くの部門が直接関わる仕事できたことは意味がありとても良かったと思います。事業化の際は外国会社との合弁事業にも手慣れた畜産生産部にご尽力いただき、何とか認可(28年10月)半年後の29年3月に新会社を立ち上げました。



過酢酸製剤と体洗浄ライン  
(株)ミートランド

### 提案制度は役員からの 「権限付与」ぜひ活用を

提案制度は、いわば役員からの「権限付与」のようなものですので、大いに活用していただければと思います。外部の会社は企業風土が違います。付き合いときは「全農的」なものは心に秘めて、ビジネスパートナーとして逃げずに辛抱強く付き合いしていく覚悟が要りますね。

# インタビュー

## 「高校球児向け栄養教育プロジェクト」に取り組む

### 立命館大学スポーツ健康科学部 海老久美子教授

立命館大学スポーツ健康科学部

海老久美子教授

# 地産地消を アスリートの 食卓へ

全農は高校野球に取り組む選手たちのチャレンジを食でサポートするため、立命館大学と「高校球児向け栄養教育プロジェクト」に取り組み、今年度から本格スタートしました。プロジェクトを担う同大学スポーツ健康科学部の海老久美子教授にスポーツと食事のあり方などを伺いました。

【広報部】

野球選手の食事について研究しようと思ったきっかけの一つは2000年のシドニーオリンピック。野球の日本代表チームに管理栄養士として帯同することになり、オリンピックに向けて社会人やプロ野球選手、チームに関わっていく中で、一部ですが、当時の野球選手の常識が分からないことがありました。例えば喫煙率がとても高く、試合のときにベンチ裏に行くと、打席順ごとにたばこが並べてあったり、飲み終えたコーヒーの缶が灰皿代わりになっていました。選手のルーティーンや願掛け、縁起担ぎにもなっていたようです。「こんな感じなんだ野球選手って」と思ったことと、いくら食事のことを言っても、地方の試合会場に行けば、各選手の地元の知り合いが待機していて、食事

時間もそこに連れて行かれることもありました。選手としてのコンディショニングの考え方が、今とは全く異なっていました。このステージの選手たちから食事の基本を、食育という形で取り入れることは、無理であり、自分の方法でここまでの選手になった人に対し、かえって失礼なことだと感じました。

### 出版した本の検証で 研究者の道歩む

やるべき対象は成長期の高校生や、もつと前の子どもたちだと思います。1990年代当時、まだ十分に水も飲まないような過酷な練習状況が主流であったのが高校球児でした。オリンピックに向けた活動の中で知り合った社会人野球チームの紹介で、公



立進学校を中心にいろいろな高校野球部に出掛けて話をする機会ができました。その一つが滋賀県立彦根東高校です。ただ、行つて話をすると、そのときは「いい話を聞きました」と言われますが、その後の選手のモチベーションを保つことは難しく、また、指導者が代わる事で、その継続が難しくなることもありました。野球のコンディショニングのベースとして食の事を残すには、何か作らなければならぬと思ったんです。それを形にしようとしてシドニーから帰国後、企画したのが『野球食』です。それまで回った高校でのことや話したこと、『ベースボールクリニック』（ベースボール・マガジン社）に連載してきたレシピをまとめて出版しました。

出版した際、後に私の師匠になる八木典子先生（甲子園大学副学長・栄養学部長）から「これ書いて、出しっぱなし？ もつたいないし、選手に失礼よ」と言われました。本を出して実践した人たちの検証が必要じゃないか、「それを出して初めて球児に対して物が言えることになる」と言われ、研究ということは考えていませんでしたが、実証するため

八木先生から「修士論文としてまとめてみれば」と勧めていただき、大学院に入り研究として取り組みました。

また、王貞治さんとハンク・アーロンさんが設立した世界少年野球推進財団の中で、全農が特別協賛して開かれる野球教室において、2009年から栄養学の講師を担当したことや、2010年から本格的に栄養サポートを開始した彦根東高校がサポーター開始後4年目に夏の甲子園初出場となったサポーター内容を元に、今年度から本格的にスタートする「高校球児向け栄養教育プロジェクト」を開始する

ことになりました。

## 高校生の食が変われば 小・中学生も変わる

このプロジェクトを通じ、ちゃんとした食事を当たり前に食べられる野球選手が育つことを願っています。今「ちゃんとした食事」が各家庭で差がありすぎてしまつて、普通がなくなつていくような気がします。

球児である前に、大事な成長期を迎えている子どもであることを考えれば、心身ともに満足できる食事を取ってほしいと思うのですが、いろんな情報に振り回され食事が食事でなくなつ

ている例もあります。

極端な例では、食事が食事としての形をなさない、コンビニの中で完結するようなスナックと飲み物に、栄養補助食品が加えられるような食卓も目にすることがあります。

日本の食文化が、スポーツ栄養では継承できなくなつてしまふのではないかと、という危機感もあります。

スポーツ栄養学というと、何か特別なものがあるだろうと考へ、疲労を速やかに回復させるには何を飲んだらいいのか、食べたらいいのか、食べさせたらいいのかという発想が、ジュニアから求められてしまうことが問題です。

サプリメントの開発に否定的ではありません。例えば、サッカーワールドカップに限らず、選手にとっての大舞台では、興奮と緊張から、消化吸収能力は落ちがちです。有効な栄養補給のためのサプリメントの開発に向けて科学していくことは必要なことです。

ただし、世界中で、成長期にある選手たちにサプリメントを積極的に勧めている国はありません。

ん。サプリメントに頼らなければ十分な栄養補給ができないほどの運動量は、健全な成長に影響を及ぼしてしまう可能性があるためです。

スポーツを頑張っている子どもたちは、その分しっかりおいしいご飯を食べる権利があるはず

です。今回のプロジェクトでは、成長期に合わせたちゃんとしたご飯が食べられるための各種データを取り解析を行う予定です。

高校生を対象にしていますが、その下の世代へも伝えたいと思つています。選手たちは自分よりも上の選手を見ているので、高校生が変われば中学生、小学生が変わります。

20年以上、成長期にある野球選手に対し栄養サポートを続けてきましたが、最初の頃は栄養の話をしに行くこと自体、強豪チームには受け入れられませんでしたし、こちらの意図を理解してくれなかった高校にしか行けませんでした。しかし、食育基本法（2005年7月施行）後「食育」という言葉が定着し、野球の世界でも食育に対する考え方が変わつてきたと思ひます。



## 地域の人たちが育む 幸せな子どもたちの食

現在、滋賀県内のJAと連携して、いろいろな取り組みを行っています。東京にいたときには考えられないような、JAや産地が、球児やスポーツ選手に近い存在だと感じています。この近い関係はともうれいことだと思います。

例えば、大学の付属校のアメリカンフットボール部とサッカー部の選手たちに冬の寒い時期には練習が終わった後、おにぎりと共に、野菜がたっぷり入った汁物を出そうという話になりました。地元JAの女性たちがおにぎりとタンパク質が豊富な大豆が入った野菜スープを作って出してくれました。おにぎりをほお張り、温かい野菜スープをいただく選手たちと女性たちのやり取りがものすごく素敵でした。生産農家の方たちにも来ていただいて、「こんな感じで食べているんです」と見ていただくことと農家さんもすごく感動してくれま

## えびくみこ 海老久美子

1962年、神奈川県生まれ。大妻女子大学家政学部卒、2007年、甲子園大学大学院栄養学研究科栄養学博士課程修了。博士(栄養学)、管理栄養士、公認スポーツ栄養士。各大学でスポーツ栄養学の教鞭をとり、2010年4月から立命館大学スポーツ健康科学部教授。著書に『野球食』（ベースボール・マガジン社）『アスリートのための食トレ〜栄養の基本と食事計画』（池田書店）『女子部活食』（ベースボール・マガジン社）など。

子どもたちを地域で育ててきたという姿だと思つたことがあります。

私の研究室では、地産地消をどうやって選手たちの食卓に取り入れるかということを考えています。その一つが、小麦粉不使用、滋賀県産大豆の丸ごとの粉で作った「アスリートスイーツ」です。また、地元のスーパーとの企画で、地元産の米、野菜をたっぷり使った、選手にもうれしいお弁当の開発も手掛けました。

今回のプロジェクトにおいて、JAからお米を提供してもらったチームでは、どんなふうにチームで使っていくか、その工夫が選手への力になる、と考え、現在検証中です。

## 公認スポーツ栄養士と JA、地域の連携に期待

今年の夏の甲子園大会が100回を迎えます。日本高等学校野球連盟は「高校野球200年構想」を打ち出し、この先の高校野球のあり方について議論を始めています。この中の「選手の障害予防」のための「栄養」について、現在、プログラムを構築中です。

その担い手となるのが「公認スポーツ栄養士」です。各都道府県の高野連と公認スポーツ栄養士を結び付け、県単位、各地域で食への取り組みが正しくできるようになっています。現在探っています。

各地域のJAの皆さまにも何らかの形で協力いただければうれしいです。相互の連携・協力体制ができ、継続していけたら素晴らしいと思います。

## ことば

**高校球児向け栄養教育プロジェクト** 全農は立命館大学と連携し、「米飯と国内産食品を中心とした日本型食生活が、高校球児の心身に及ぼす影響」を調査。2017年度は準備期間で、18年度から本格スタートし、3年間調査して、20年度にデータ分析などの検証を行い、プロジェクトの成果を書籍・冊子にして高校野球連盟を通じて加盟校に配布する他、高校球児向け栄養教育プログラムを開発する。この期間、随時シンポジウムや講演会などを開く予定。全農は調査対象校の一部に毎月4000円を上限に地元JAの米を提供する。

**公認スポーツ栄養士** トップアスリートからジュニア層などチームや団体内で監督、コーチ、トレーナー、医学の各専門スタッフと連携し、栄養面から専門的なサポートをするスポーツ栄養の専門家。管理栄養士の資格を持ち、講習、検定試験を受けて、公益社団法人 日本栄養士会と公益財団法人 日本スポーツ協会が共同で認定する資格。認定者は2017年度末で259人（日本栄養士会ホームページから）。

5  
名様

## 海老久美子教授の著書プレゼント

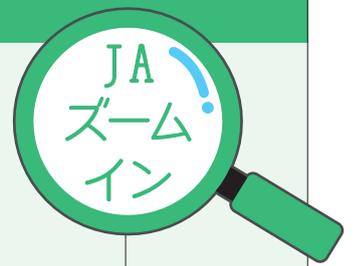
海老久美子教授の『野球食のレシピ』（ベースボール・マガジン社）を抽選で5人にプレゼントします。郵便はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、所属JA、電話番号、「JA全農ウィークリー」の感想をご記入の上、ご応募ください。

〒100-6832 東京都千代田区大手町1-3-1 JA全農広報部  
JA全農ウィークリー「海老久美子教授本プレゼント」係

平成30年8月31日(金)  
当日消印有効

\*応募者多数の場合は抽選で当選者を決定いたします。また、当選の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。  
\*いただいた個人情報は、プレゼントの発送にのみ使用いたします。





# 富士北麓の気象条件生かして

# 時期重ならぬ県内出荷に活路

山梨県のJA北富士は、標高800〜1000級の夏涼しく・冬厳しい富士山北麓にあり、年間460万人の観光客が訪れ、国内外からも注目されている地域です。

## 初夏から秋にかけて 多彩な野菜を生産

管内の野菜生産・販売は、5月中旬のレタスから始まり、初夏採りのカリフラワー・ブロッコリー、夏

「去年見事に初収穫にこぎ着けた「富士もも」」

人気の高いトウモロコシ「恵味(めぐみ)」



本番にはトウモロコシ・トマト・キュウリ・インゲンがメインで、9月中旬から10月末まではカリフラワー・ブロッコリーとなります。生産者は多品目栽培で安定した収入を確保することに努めています。県内の他産地と出荷時期が重ならないため、県内出荷が中心です。

また富士北麓の統一ブランド「富士山やさい」の生産・販売を普及センターと県総合農業技術センター・岳麓試験地と協力し、その中心的役割を担っています。

8月中心の朝採りトウモロコシは大手メディアにたびたび取り上げられ、人気商品となっています。県内大手スーパーを中心に需要が多く、供給が間に合わない状態

## JA北富士 (山梨県)



富士山やさい

「富士山やさい」ロゴマーク

となつているため、富士河口湖町農林課と連携して規模拡大に取り組んでいます。

花栽培も盛んで、5人の生産者により8品種の育種登録がある「富士のニオイザクラ」は日本一の生産地です。

## サクランボ、桃栽培 産地化と観光農業へ

富士河口湖町周辺には、四季を通して多くの観光客が

概要	平成30年1月31日現在
正組合員数	1441人
准組合員数	1081人
職員数	22人
販売品取扱高	5千万円
購買品取扱高	1億6千万円
貯金残高	61億5千万円
長期共済保有高	645億3千万円
主な農産物	トウモロコシ、ブロッコリー、カリフラワー、トマト

訪れています。農業と観光を結び付けたブルーベリー狩り、富士北麓地域初のサクランボ栽培に挑戦したサクランボ狩りも人気となっています。

不可能といわれていた桃栽培に町と協力して挑戦中で、昨年見事に初収穫できました。そして富士山と桃の花の共演は、日本中どこを探してもない見事な景観になっています。

他の地域から移り住んで農業を目指す人たちも現れ、独立して就農した人や研修中の人も地域に溶け込み頑張っています。

花では、「さくら咲くプロジェクト」の立ち上げに協力して、「ニオイザクラ」の6次化の取り組みを進めています。

# 県本部 だより

長野県本部



## 経済連時代から力注ぐ 青果物の直販事業 生産販売部営業課が先頭に立ち売り込み

長野県本部は経済連時代の昭和63年から青果物の直販事業を始めています。現在は生産販売部営業課で直販事業を行っており、平成29年度の営業課の取扱高は

138億円でした。

青果物流通は市場流通が主流ですが、直販事業は市場を経由せず、実需者（量販店や加工業者）に直接販売しています。営業課の販売

スタッフは産地を回って青果物の直販流通での出荷を依頼するとともに、実需者や流通業者と価格や数量、売り方の提案などの商談を行っています。

### コープこうべで夏の信州フェア

7月6～8日、直販事業のお客さまのコープこうべ



コープこうべで夏の信州フェア



株久原醤油とタイアップ「長野県産のきたくて野菜たっぷり塩炒め」で売り込みも

この夏は冬場の鍋食材のイメージがあり、夏場は需要が減少するのが悩みです。夏場もおいしいきのこをたくさん食べてもらいたいとの思いから、営業課では6月から7月に全国の量販店延べ約160店舗できのこの試食販売を実施しています。量販店の株オークワと株ライフコーポレーション

### タイアップで夏場にきのこの試食販売

長野県はエノキタケ・ブナシメジの生産量が全国一位で、きのこの一大産地です。

で、店舗と共同購入の同時企画の「夏の信州フェア」を実施しました。品目はレタスやハクサイ、キャベツなどの野菜とエノキタケやブナシメジなどのきのこ類です。8月3～5日は、レタスとスイカを中心とした「夏の信州フェア」の第2弾を行いました。

直販事業ではコンテナや段ボール箱で集荷した果実を実需者の要望に応じ、委託先である信州生鮮流通（株）でリパック（再包装）をして販売しています。今シーズンは6月のアンズから始まり、7月はブルーベリー、ネクタリンをリパックで販売しています。リパック販売は順次、桃、ブドウ、リンゴ、年明けの干し柿まで続いていきます。

### 7月から年明けまで続く 果実のリパック販売

ンでは、株久原醤油とタイアップしたメニュー提案による試食販売を実施し大変好評を得ました。



ネクタリンのリパック製品

# [ 青果情勢 ]

(園芸部)



## 野菜

### 夏秋産地からの出荷が本格化

#### 概況

8月は、東北・北海道や高冷地などが主産地となり、出荷最盛期を迎えます。キャベツは、群馬の高冷地や岩手・長野などが中心の出荷となります。群馬・長野は高温と干ばつから生育は鈍いですが、徐々に回復する見込みです。岩手は気温の上昇から最盛期となるでしょう。出荷量は前年並みを見込みます。

ハクサイは、長野などが中心の出荷となります。干ばつ傾向ではありますが、生育はおおむね順調となっています。大きな天候の崩れなどなければ、順調な出荷が見込まれます。出荷量は、前年並みを見込んでいます。

ダイコンは、北海道・青森などが中心の出荷となります。北海道は、種まきできていない時期があり、一時的に出荷ペースが停滞する畑もあるでしょう。出荷量は前年をやや下回る見込みです。

ニンジン、北海道・青森などが中心の出荷になります。7月中旬までの低温と長雨から、細物中心となっています。出荷量は、豊作であった前年を下回る見込みです。

レタスは、長野・群馬の高冷地が中心の出荷となります。他の葉物野菜と同様、順調な出荷が見込まれますが、高温による出荷量減少が懸念されます。出荷量は、前年を下回る見込みです。

トマトは、北海道・東北産地が中心の出荷となります。7月中旬までの低温・長雨から、出荷量は回復に向かうものの、花落ちした段がみられるため、前年を下回る出荷を見込みます。

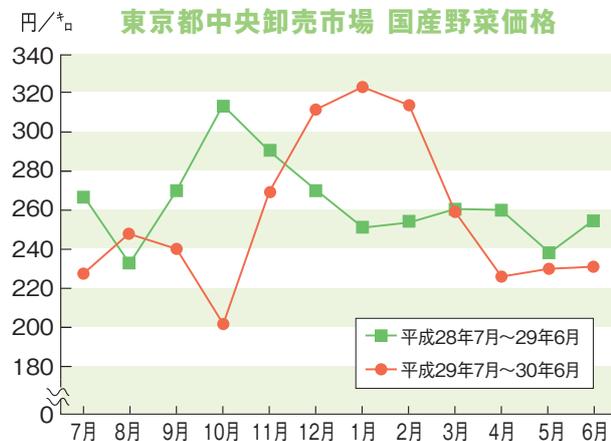
キュウリは、東北産地の露地物が中心の出荷となります。8月上旬に向け、各産地は出荷最盛期を迎えるでしょう。出荷量は、前年並みを見込んでいます。

ナスは、関東産地が中心の出荷となります。8月上旬に出荷最盛期を迎え、盆明け以降徐々に減少するでしょう。出荷量は前年並みを見込みます。

タマネギは、北海道からの出荷が始まります。出荷量は、潤沢だった前年並みを見込んでいます。

#### 店頭

7月に引き続き、清涼感のあるレタス、トマト、キュウリなどのサラダ商材や、ミョウガ、小ネギ、大葉などの薬味商材の荷動きが活発になる時期です。その他、エダマメ、トウモロコシ、ゴーヤー、ナスなどの季節感のある商材が積極的に陳列されます。



## 果実

### 夏果実の出荷ピーク

#### 概況

8月は、出荷の後半となる桃・スイカ・メロン類に加え、ハウスミカン・ナシ・ブドウ・スモモが本格的な出回りとなります。

桃は、福島・山梨などが中心の出荷となります。生育は前年より早く、福島の「あかつき」、山梨の「川中島白桃」など、さまざまな品種が出回ります。出荷量は、前年をやや下回る見込みです。

スイカは、山形・長野などが中心の出荷となります。山形はお盆が出荷ピークとなり長野も8月前半がピークとなる見込みです。出荷量は前年をやや下回る見込みです。

メロン類は、関東産地から北海道・青森などに切り替わります。北海道産のピークはお盆明けになる見込みです。出荷量は前年をやや下回る見込みです。

ブドウは、「デラウェア」が山形、大粒品種が山梨・長野などが中心の出荷となります。大粒品種は「巨峰」や「ピオーネ」などの品種が出回ります。ピークは8月上旬となる見込みで、出荷量は前年を上回る見込みです。

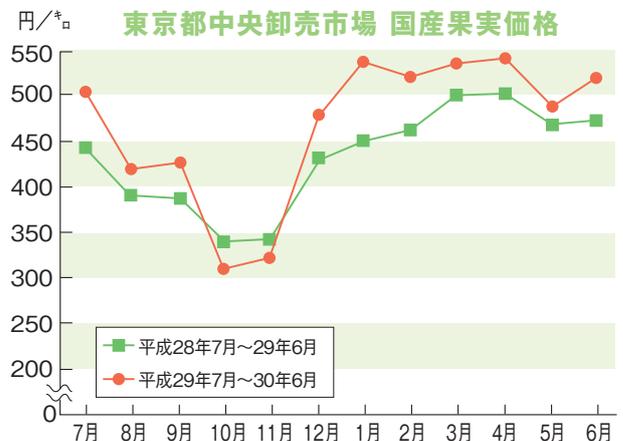
ナシは、福岡などの九州産地、千葉・茨城などが中心の出荷となります。生育は遅かった前年と比べると1週間ほど早く、関東産「幸水」のピークは8月上旬となる見込みです。出荷量は前年を上回る見込みです。

ハウスミカンは、佐賀・愛知・愛媛などが中心の出荷となります。高温干ばつ傾向で着色遅れが見られますが、食味は充実しています。出荷量は、前年並みを見込んでいます。

リンゴは、8月から30年産の出荷が始まります。出荷量は、前年を上回る見込みです。

#### 店頭

旧盆や夏休みなどがテーマとなった売り場作りが行われる8月は、量販店や果実専門店の売り上げが1年の内で一番多い月です。販売方法も1品目で複数の規格の品ぞろえをするにぎやかな売り場となります。



### 主産県だより

7月はレタス、ナシ、ピーマン、ブロッコリー、桃、リンゴ、アスパラガスの主産県が一堂に会い、作況見通しや販売対策の共有化、消費拡大の進め方について協議しました。今後も主産県による情報交換会などを定期的に関催し、出荷情報や販売情報の共有を図ります。

# [ 畜産情勢 ]

(畜産総合対策部)



## 牛肉

和牛もちあい、交雑牛やや強含み

7月の成牛と畜頭数は、速報値で約9万3千頭(前年比102.8%)とわずかに増加しました。

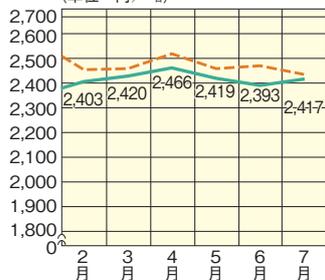
7月の東京市場枝肉卸売価格は、速報値で和牛去勢A5が2822円(前年比100.4%)、和牛去勢A4が2417円(同99.2%)、和牛去勢A3が2170円(同101.8%)、交雑牛B3が1525円(同104.5%)でした。

農畜産業振興機構の8月の国内出荷予測頭数を品種別にみると、和牛が約3万3千頭(前年比99.7%)、交雑牛が約1万9千頭(同99.0%)、乳用種が約2万8千頭(同92.8%)で、全体では約8万1千頭(同96.9%)と見込んでいます。

7月の相場は、和牛はもちあい、交雑牛は一部には和牛からの需要シフトとみられる動きもあり、やや強含みで推移しました。

8月の相場は、盆前までは強含みで推移することも想定されますが、月間では和牛はもちあい、一方で交雑牛はやや強含みの展開になると見込んでいます。

牛枝肉相場(東京市場・和牛去勢A-4)  
平成30年2月~30年7月  
平成29年2月~29年7月  
(単位:円/キログラム)



## 豚肉

盆休み明けから相場は低調に推移

7月の全国と畜頭数は、速報値で約126万頭、前年比102.1%となりました。

7月の東京食肉市場枝肉相場は、速報値で652円/kg(前年比98.9%、前月比110.9%)でした。三連休前の手当てを行うタイミングで西日本の豪雨被害が発生、愛媛県のと畜場が被害を受けたほか交通網の混乱もあり、西日本から関東の業者に対して供給依頼が増え、関東周辺市場の相場を押し上げました。さらに、下旬には猛暑で出荷頭数や重量が低下したことで相場は高値で推移しました。

農畜産業振興機構の8月出荷予測頭数は、約131万頭(前年比99.6%)です。荷動きは低調なものの、出荷数量が少ないことに加え、8月も引き続き猛暑となる予報から、今後も増体の悪い豚の出荷が続く可能性が高く、8月前半までは高値が続くと思われます。一方、盆休み明けから下旬にかけては末端消費の低迷を反映して、相場は低調に推移するものと思われます。

豚枝肉相場(東京市場規格「上」)  
平成30年2月~30年7月  
平成29年2月~29年7月  
(単位:円/キログラム)



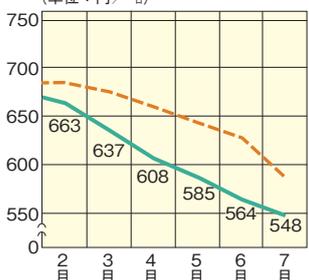
## 鶏肉

もも小幅下げの540円

7月の平均相場は、もも肉548円/kg(前月比16円下げ)・むね肉265円/kg(同7円下げ)で、正肉合計で813円/kgと前月比23円下げ、前年比で102円の下げとなりました。もも肉は、猛暑などで末端販売の緩みが先月から続いているため下げ基調は変わらず、月初め550円から月末545円と5円の下げとなりました。むね肉は、サラダチキンなどの需要は継続しており、月初・月末とも264円ともちあいとなりました。また、正肉合計では一時800円/kgを割る(799円/kg)日も見受けられました。

8月は、7月に引き続き猛暑となる予報から、もも肉は下げ基調で推移するものの小幅の下げで月平均540円と予測します。また、むね肉は引き続きチキンカツ・焼き肉用・サラダチキンなどの需要もあり、もちあい圏内の265円と予測します。

ブロイラー市況(もも肉・東京)  
平成30年2月~30年7月  
平成29年2月~29年7月  
(単位:円/キログラム)



## 鶏卵

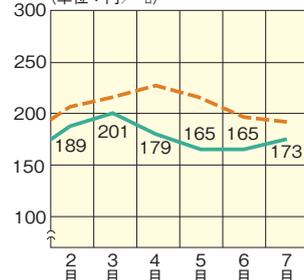
供給量少なめ酷暑で需要減

7月の東京相場の月間平均は、Mサイズ基準値173円(前年比△18円)となりました。成鶏更新・空舎延長事業の影響から需給に逼迫感が見られ、7月上旬に上伸の展開となりました。先月から続いている西日本向けへのスポット出荷も相場上伸の一因となりました。ただし、7月中旬以降は、供給量が少ない一方で、酷暑や天候不順の影響により需要が減退したことから、もちあいが続きました。

需要面に関して、テーブルエッグは、相場変動商品を中心に好調を維持していましたが、気温の上昇と共に荷動きに鈍化が見られます。業務筋は、末端需要の鈍化に加え、学校給食の休止などで不振が続いています。

今後は、成鶏更新・空舎延長事業の影響により、一定期間は供給量は少なめで推移すると考えられます。ただし、需要面についても酷暑による末端需要の減退やお盆期間による業務筋の休業など好材料に乏しい状況が続くことが予測されます。

鶏卵相場(東京・Mサイズ基準)  
平成30年2月~30年7月  
平成29年2月~29年7月  
(単位:円/キログラム)



全国各地でJA全農WCBF少年野球教室

投げる・捕る・打つ・走る  
元プロ野球選手が基本を熱血指導



全農は今年も「JA全農WCBF少年野球教室」を開いています。26年目となる今年は全国6会場で開催を予定し、4月21日の沖縄県那覇市を皮切りに、5月19日に大分県別府市、6月16日に福井県敦賀市、7月14日に鳥取県鳥取市と8月までに計4回を開催しました。これまで地元の小中学生、指導者、保護者延べ1090人が参加しました。【広報部】



打席に立ちバッティングの指導をする王理事長(鳥取会場)



小学生と外野練習をする巨人OBの鈴木尚広講師(敦賀会場)

この野球教室は、王貞治氏が理事長を務める一般財団法人世界少年野球推進財団(WCBF)が主催し、全農が特別協賛しています。講師は、王理事長をはじめ元プロ野球選手の西崎幸広氏(日本ハムOB)らが務め、子どもたちに「投げる」、「捕る」、「打つ」、「走る」の基本を分かりやすく指導しました。

ポジション別の守備指導の他に、バッティング指導では講師自らが打席に立ち、スイングの指導と実技を披露し、里崎



開校式であいさつする岩城晴哉専務(鳥取会場)

智也氏(ロッテOB)は軽々とホームランを打って見せる場面もありました。

参加した小学生は「プロで活躍した選手から指導してもらい、勉強になりました」「プロのスイングスピードや打球の力強さを感じました」、指導者からは「元プロ

野球選手ならではの指導方法も聞くことができ、子どもたちへの指導内容も濃かった」などと感想を述べていました。

全農はこの教室を通じて健康で元気な野球少年を育て、子どもたちの夢や成長を応援していきます。

開催日	会場	参加小学生
4月21日	沖縄県那覇市 沖縄セルラースタジアム那覇	217人
5月19日	大分県別府市 別府市市民球場	140人
6月16日	福井県敦賀市 敦賀市総合運動公園野球場	198人
7月14日	鳥取県鳥取市 鳥取市営美保球場	258人
9月29日	神奈川県平塚市 相石スタジアムひらつか	-
11月17日	大阪府八尾市 八尾市立山本球場	-

協賛 | 全国農協食品(株)、全農パールライス(株)、JA全農青果センター(株)、JA全農たまご(株)、JA全農ミートフーズ(株)、全農チキンフーズ(株)、雪印メグミルク(株)

JAタウン ショップ紹介

JAタウン | 検索 クリック

JAぎふ(岐阜県)



JAタウンは こちらから



完熟梨・幸水(平箱)12玉 感動のみずみずしさ!.....5000円

岐阜県本巣市の梨は色と糖度にこだわり、おいしい梨をお客さまに食べていただくということを一番に考え、作り続けてきました。樹上で完熟するまで待ち、梨栽培のプロの目によって食べ頃を見極めて収穫します。そのため、他産地の梨よりも甘みが強く、シャキシャキした食感と滴り落ちる果汁は格別です。

また、従来の栽培に比べて化学合成農薬や化学肥料をそれぞれ30%以上削減した農産物に対して岐阜県が認定する「ぎふクリーン農業」にも認定されています。

本巣の生産者の方々が真心を込めて作った「幸水」をぜひ一度ご賞味ください。

なお、ご紹介した商品は、8/24(金)まで、FAXでもご注文を承ります(ご自宅宛代金引換のみ)。【ご注文方法】①商品名、規格、数量②郵便番号③住所④氏名⑤電話番号⑥FAX番号をご記入のうえ、FAX番号03-5218-2517までご送信ください。商品代金のほか、お届け先により送料が必要となります。

JA全農のインターネット ショッピングモール ▶ご注文は <http://www.ja-town.com> ▶お問い合わせは [shop@ja-town1.com](mailto:shop@ja-town1.com)

※本誌を通じていただいた注文などで取得した個人情報、商品等の発送にのみ使用します。